目白大学　総合科学研究
第19号　2023年2月　13-23

論文

保育の可視化とドキュメンテーションの活用実態及びその課題

Visualization of Early Childhood Care and Education and Actual use of documentation and its problems

佐藤　牧子
（Makiko SATO）

Abstract：
Documentations observed in childcare practices, while sufficing certain format requirements in terms of comments accompanying images, often lack records on children's learning and activity processes. To look into this issue, this study conducted a questionnaire survey targeting the presently active childcare workers on visualization of childcare and the reality of documentation utilization.
According to the survey result, 54.5% of the childcare workers utilized documentation. The originally intended value of documentation is in how it enables the three parties – "child", "nursery and kindergarten teacher", and "parents" – communicate with each other through documentation and respectively "learn" and "reflect" on their activities. However, to the question on "visualization of childcare and purpose of dissemination," 47.3% of the respondents stated that their purpose is to report to the parents and to get their understanding, demonstrating how it has become a one-way communication tool..

キーワード：保育の可視化、ドキュメンテーション、テキストマイニング
Keywords ：Childhood education and care, visualization, documentation, textmining,

１．はじめに

（１）問題の所在

幼児教育・保育（以下、保育）において子どもたちは、環境と主体的に関わりながら遊びを通して体験的に多くのことを学んでいる。これまでは、保育に携わる者の間でこれらの学びが暗黙知のような形で共有されることも多く、また、保育が達成目標ではなく方向目標の下で行われていることもあり、保育に直接関わりのない者にとってはより一層「子どもの学び」が見えにくい状況になっていたと言える。しかし、2016年12月には中央教育審議会答申において、「「社会に開かれた教育課程」の実現」を目指すことが示され、2018年より実施の幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領からは、幼児教育を行う施設として幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園が、「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し、小学校教育への接続を図ることが求められるようになった。暗黙知ではなく、共通の言葉（概念）を使うことにより、これまで閉じられていた保育が

佐藤 牧子：人間学部子ども学科助教

開かれて可視化されるきっかけを得ると同時に、これまでは暗黙知として共有していたと思っていたことが、実は共有されていなかったのではないかという疑念も浮き彫りになったのではないだろうか。

イタリアのレッジョ・エミリアで生まれたドキュメンテーションは、「子どもたちの日常の学びのプロセスを可視化し、「見える化」するツールのひとつ」（岩田・大豆生田, 2018）で、「子どもの活動を写真などの視覚的な資料を用いて可視化することで、活動全体の流れや活動時の子どもの様子を共有できる良さ」（山本, 2018）がある。また可視化することにより保育者や保護者による子ども理解が深まり、保育者が保育を見直す際の手がかりにもなる。さらに子ども自身が活動を振り返り、子ども同士で情報を共有するツールとしての機能も併せ持つ記録方法である。最近では、幼稚園・保育所・認定こども園を訪れると、多くの園で訪問者にも見える場所にドキュメンテーションと呼ばれるものが掲示されており、園の方が積極的に説明をしてくれる機会も多い。しかし、様々なところでドキュメンテーションとして紹介されるものを見比べてみると、写真に言葉が添えてあるという点においては同じ様式であるが、内容には随分違いがあるように感じられる。例えば、写真とともに子どもの学びのプロセスや背景がしっかりと描かれている記録もあれば、写真から受け取れる事実が、短い言葉で再度書き添えられているだけのものもあり、ドキュメンテーションの実態は様々であると言える。

（2）目的

保育の可視化やドキュメンテーションに関する先行研究には、レッジョ・エミリア・アプローチにおける観察・記録の方法としてのドキュメンテーション研究（山本, 2018）や、子どものつぶやきを拾うドキュメンテーションが保育者にどのように役に立つかについての研究（植草, 2018）、ドキュメンテーションの写真分析から保育者の関心を捉えた前田（2020）の研究や、岩田・大豆生田ら（2019）による学生の実習日誌をドキュメンテーション型にする試みなどの研究が多数ある。本研究においては、保育施設（幼稚園、保育所、認定こども園）における保育の可視化とドキュメンテーションの活用実態について調査し、ドキュメンテーションの実施に伴う課題を明らかにする。

２．方法

（1）調査時期および対象

2022年３月下旬から５月下旬にかけて質問紙調査を実施した。調査対象は、関東圏内の幼稚園・保育所・認定こども園の計360施設とし、回答者については園長および施設長が質問紙の内容を鑑みて、施設内で適当な回答者を選出して実施してもらう形をとった。地域の均等を図るために、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の４地域の割り当てを各90施設とし、さらに施設種の均等を図るために、各地域の割り当て分90施設を幼稚園・保育所・認定こども園の３種で均等割りして、各30施設ずつとした。施設の選定においては、各都道府県が情報公開をしているリストから筆者が無作為に選定を行い、質問紙と調査説明書を送付し、返却用の封筒にて質問紙を回収した。

（2）質問紙の概要

ⅰ）調査対象の属性

①施設の形態（私立／公立幼稚園、私立／公立保育所、私立／公立認定こども園、その他）、②規模（園児数）、③対象年齢、④地域（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の４項目を設けた。

ⅱ）ドキュメンテーションの導入実態について

ドキュメンテーションの導入実態を把握するために、「ドキュメンテーションの導入状況に関する質問」とドキュメンテーションを取り入れている、または取り入れる予定と回答した人に対して「ドキュメンテーションの記録媒体に関する質問」を選択式で行った。

ⅲ）保育の可視化について

園または保育者（回答者）自身が保育において、子どもの育ちや学び、遊びや活動の過程をどのような目的や方法で可視化して発信しているかについての質問項目を設定した。可視化の方法に関する質問項目では、デジタル配信（ホームページ、SNSなど）およびアナログ配信（玄関ボード、お便りなど）の利用状況や、個別

のアナログ記録（ドキュメンテーション、ポートフォリオ 、作品集など）および、クラスやプロジェクト単位のアナログ記録の利用状況についての項目を選択式で設定した。目的や配慮事項などに関しては、保育の可視化と発信の目的についての項目を選択式で設定し、配慮事項と困りごとについての項目は自由記述形式で設定した。

ⅳ）保育中の記録ついて

保育中の記録方法や配慮事項についての質問項目では、保育中の記録写真・映像の撮影を誰が行っているか、記録機材の種類（カメラ、スマホ、タブレットなど)、子ども自身が記録撮影する機会があるかなどの項目を選択式で設定し、記録写真・映像を撮る際の配慮事項、保育中に記録することの困難さについての項目は自由記述形式で設定した。

ⅴ）自由記述

質問紙の最後に、質問紙の内容または保育において、現在興味があることや取り組んでいることなどに関する自由記述形式の項目を設定した。

（3）倫理的配慮

本調査は無記名で実施し、個人が特定されることはないこと、参加は自由で途中でいつでも中止でき、回答しないことで不利益になることはないこと、及び本研究の目的と内容を「研究の説明」に明記して、質問紙とセットにして配布した。本研究に利益相反はない。本研究は目白大学における人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会の承認（21人-008）を得た。

（4）分析方法

選択式の項目については単純集計を行い、最後の項目「(回答者の）自由記述」を除く自由記述形式のデータ解析には、User Localテキスト・マイニングツールを使用し、さらに一部の解析結果をKJ法で分類して、カテゴリー名を付けて整理した。

３．調査結果

（1）調査対象の属性

配布した質問紙360件のうち、101施設から協力を得られ回収率は28％であった。施設種の内訳は、幼稚園（22.8%)、保育所（30.7%)、認定こども園（45.5%）公設民営保育所（1.0%）で、規模（園児数）の内訳は、50人未満（5.9%)、51人～100人（27.7%)、101人～150人（29.7%)、151人～200人（13.9%)、201人～250人（9.9%)、251人～300人（6.9%)、301人～350人（3.0%)、351人～4000人（2.0%)、400人以上（1.0%）であった。地域の内訳は、東京都（25.7%)、神奈川県（25.7%)、埼玉県（20.8%)、千葉県（27.7%）であった。

（2）ドキュメンテーションの導入実態について

ドキュメンテーションの導入実態で一番多かった回答が、園・施設の方針または個人で「すでに導入している（54.5%)」で、次いで「現在のところ、導入予定がない（24.8%)」、「ドキュメンテーションという言葉を初めて聞いた（11.9%)」、「導入を検討している（5.0%)」、「その他（4.0%)」となった（表1)。

表1　ドキュメンテーションの導入実態

1　すでに導入している（園・施設の方針、個人）	54.5%	(55)
2　現在のところ、導入予定がない	24.8%	(25)
3　「ドキュメンテーション」という言葉を初めて聞いた	11.9%	(12)
4　今後、導入を検討している	5.0%	(5)
5　その他	4.0%	(4)
	100.0%	(101)

また、ドキュメンテーションを「すでに導入している（54.5%）」の回答に対して、ドキュメンテーションの記録方法について尋ねたころ、一番多かった回答が「特定のフォーマットなし（34.5%）」で、次いで「デジタル（アプリケーション使用含む）（29.1%）」、「アナログ（紙）（21.8%）」、「アナログ（紙）＋デジタル（アプリケーション使用含む）併用（14.5%）」であることがわかった（表2）。さらに、デジタルを使用していると回答した43.6%に対して、使用しているデジタルツールについて尋ねてみると、「ドキュメンテーション専用のシステムを導入している（58.3%）」で、「園独自のデジタルフォーマットを使用している（41.7%）」であった（表3）。

（3）保育の可視化について

ｉ）可視化の方法

保育の可視化にかかわるデジタル配信の質問では、「自園のホームページやSNS（Instagram, Facebook）などによるデジタル配信を行なっている」という回答が71.3%で、「行なっていない」が27.7%、「無回答」が1.0%であった。デジタル配信の頻度については、最も多かった回答が不定期や行事のタイミングで配信するなどの「その他（26.4%）」で、次いで「月１（22.2%）」、「週１（19.4%）」、「毎日（18.1%）」、「隔週（9.7%）」、「無回答（4.2%）」の順であった（表4）。

次に、アナログ配信の質問では「玄関ボードや紙などによる、アナログ配信を行なっている」という回答が、66.3%で、「行なっていない」が25.7%、「無回答が」7.9%であった。アナログ配信の頻度については、最も多かった回答が「毎日（34.3%）」で、次いで「月１（19.4%）」、不定期や行事のタイミングで配信するなどの「その他（19.4%）」、「週１（9.0%）」、「隔週（7.5%）」、「無回答（10.4%）」であった（表5）。

表2　ドキュメンテーションの記録方法について

1	特定のフォーマットなし	34.5%	（19）
2	デジタル（アプリケーション使用含む）	29.1%	（16）
3	アナログ（紙）	21.8%	（12）
4	アナログ（紙）＋デジタル（アプリケーション使用含む）併用	14.5%	（8）
		100.0%	（55）

表3　デジタルツールについて

1	ドキュメンテーション専用のシステムを導入している	58.3%	（14）
2	園独自のデジタルフォーマットを使用している	41.7%	（10）
		100.0%	（24）

表4　デジタル配信の頻度

1	その他（不定期、行事のタイミングなど）	26.4%	（19）
2	月１	22.2%	（16）
3	週１	19.4%	（14）
4	毎日	18.1%	（13）
5	隔週	9.7%	（7）
6	無回答	4.2%	（3）
		100.0%	（72）

また、「個別のアナログ記録（ドキュメンテーション、ポートフォリオ 、作品集など）を作成している」という回答が28.7%、「作成していない（68.3%）」、「無回答（3.0%）」で、「クラスやプロジェクト単位のアナログ記録を作成している」については「作成している」と「作成していない」が47.5%で同率、「無回答（3.0%）」であった。

ⅱ）可視化と発信の目的、配慮事項など

保育の可視化と発信の目的について、9 項目から複数選択式で回答を求めたところ、313件が選択された。最も多かった回答が「保護者に対して保育内容や子どもの様子を伝えるため（28.1%）」で、次いで「子どもの育ちや学びの過程を記録するため（19.8%）」、「保護者から保育内容の理解を得るため（19.2%）」、「社会に開かれた園・保育であるため（8.9%）」、「保育者の振り返りのため（8.6%）」、「子どもの自身の振り返りのため（4.8%）」、「子ども間の情報共有のため（4.8%）」、「園内研修や研究で使用するため（4.2%）」、「その他（0.6%）」、「無回答（1.0%）」であった（表6）。

さらに、表 6 の項目を目的の方向性という観点で分類（1・3 は「保護者」、2 は「記録」、4 は「社会」、5・8 は「保育者」、6・7 は「子ども」）して整理した結果が表 7 である。保育の可視化と発信の目的を方向性の観点でみると、約半分にあたる47.3%が「保護者」に向けた目的であることがわかる。次に「記録」としての目的が19.8%、「保育者」に向けては12.8%、「子ども」に向けては9.6%、「社会」に向けては8.9%であった。

「その他（0.6%）」では、「個人記録をわかりやすくし、園内で共有できるため」「職員間で互いにどのような保育をしているか把握するため」という回答があった。

次に、保育を可視化して発信する際に配慮していることについて、自由記述形式で尋ねたと

表5　アナログ配信の頻度

1	毎日	34.3%	（23）
2	月１	19.4%	（13）
3	その他（不定期、行事のタイミングなど）	19.4%	（13）
4	週１	9.0%	（6）
5	隔週	7.5%	（5）
6	無回答	10.4%	（7）
		100.0%	（67）

表6　保育の可視化と発信の目的

1	保護者に対して保育内容や子どもの様子を伝えるため	28.1%	（88）
2	子どもの育ちや学びの過程を記録するため	19.8%	（62）
3	保護者から保育内容の理解を得るため	19.2%	（60）
4	社会に開かれた園・保育であるため	8.9%	（28）
5	保育者の振り返りのため	8.6%	（27）
6	子どもの自身の振り返りのため	4.8%	（15）
7	子ども間の情報共有のため	4.8%	（15）
8	園内研修や研究で使用するため	4.2%	（13）
9	その他	0.6%	（2）
10	無回答	1.0%	（3）
		100.0%	（313）

表7　保育の可視化と発信の目的（方向性別）

1 【保護者】保護者に保育内容や子どもの様子を伝え、保育の理解を得るため	47.3%	（148）
2 【記録】子どもの育ちや学びの過程を記録するため	19.8%	（62）
3 【保育者】保育者の振り返りと研修資料として活用するため	12.8%	（40）
4 【子ども】子ども自身の振り返りと、子ども間の情報共有するため	9.6%	（30）
5 【社会】社会に開かれた園・保育であるため	8.9%	（28）
6 無回答、その他	1.6%	（5）
	100.0%	（313）

ころ73件の回答を得ることができた。73件の自由記述データをテキストマイニングで解析した結果、図１のワードクラウド[1]が生成された。名詞では「個人情報」「保護者」「子ども」「園児」「保育」「配慮」の出現頻度・スコアが高かった。動詞では「写る」「伝える」「伝わる」「知らせる」「交える」のスコアが高かった。「伝える」と「伝わる」については、表記のゆらぎとして統一を検討したが、文脈上統一することが難しかったため統一せずに分析にかけた。形容詞では、「分かり易い」「伝わりにくい」のスコアが高かった。

最後に、保育を可視化して発信する上で困っていることについて、自由記述形式で尋ねたところ50件の回答を得ることができた。得られた50件の自由記述データをテキストマイニングで解析した結果、10行の文書要約[2]が生成された。さらに、KJ法を用いて要約文を分類してカテゴリー名を付けて整理した結果、表８の通り５つのカテゴリー「記録時（3件）」、「機材（2件）」、「所要時間（2件）」、「記録内容（2件）」、「その他（1件）」が生成された。

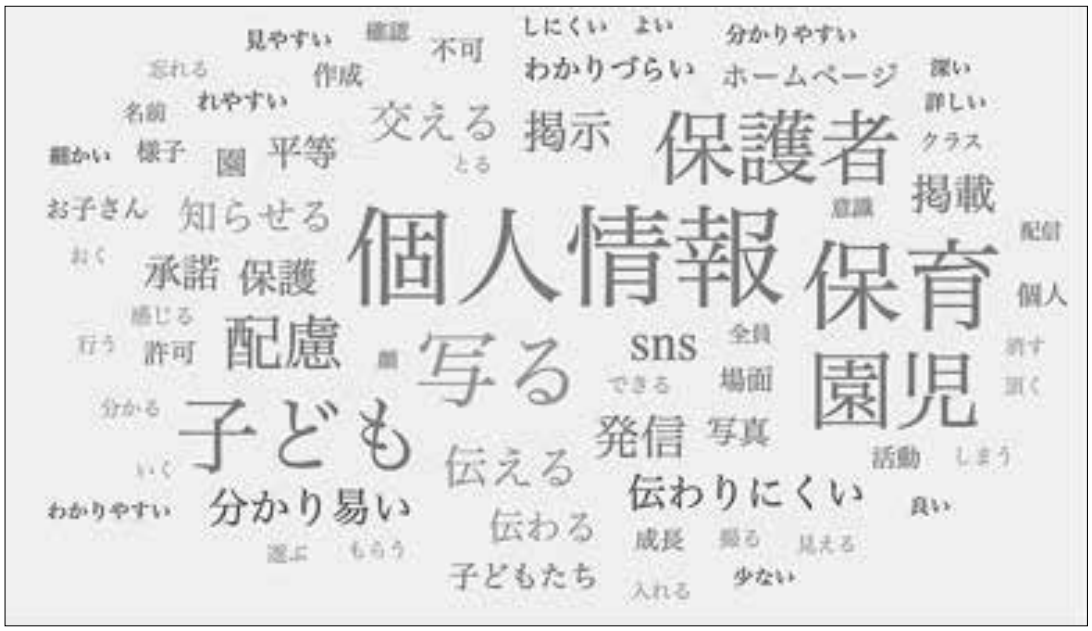

図１［ワードクラウド/スコア順］保育を可視化して発信する際に配慮していること

表8　保育を可視化して発信する上で困っていること

カテゴリー	テキストマイニングによる文書要約　＊［ ］は筆者が補足
記録時	・［子どもと］一緒に活動に参加していることで、シャッターチャンスを逃してしまう
	・［記録したい場面に］出会った人がカメラを持っていない
	・保育中に記録（写真）を撮ることが難しい
	・［保育者が］写真を撮ることに集中してしまう時がある
機材	・［編集・出力するための］パソコンやプリンターの数が少なく、休憩時間を使いながら対応している
	・まだ私物のスマホ等を使用しなければならない時も多いこと
所要時間	・［記録写真の］選択に時間がかかる、間違えのないようにする為
	・実際に、ドキュメンテーションなどを取り入れたい気持ちはあるが作成する時間の確保が難しい
記録内容	・クラスによる差が激しいこと（回数、写真の枚数、言葉等）
その他	・保育士自身の立ち振る舞い（可視化によって気づくこともあるが）

（4）保育中の記録ついて

保育中の記録方法やその配慮事項について、写真・映像を撮る際に配慮している点について選択式で尋ねた結果、回答の半数が「活動過程がわかるように記録すること（50.5%）」で、次いで「子どもの表情を中心に記録すること（30.7%）」、「作品がよく見えるように撮影すること（3.0%）」、「その他（4.0%）」、「無回答（11.9%）」で（表9）あった。

さらに、保育中の記録において難しいと感じることについて、自由記述形式で尋ねたところ64件の回答を得ることができた。得られた64件の自由記述データをテキストマイニングで解析した結果、10行の文書要約[2)]が生成された。さらにKJ法を用いて要約文を分類してカテゴリー名を付けて整理した結果、表10の通り4つのカテゴリー「子どもとの関わり（3件）」、

表9　写真・映像を撮る際に配慮していること

1	活動過程がわかるように記録すること	50.5%	（51）
2	子どもの表情を中心に記録すること	30.7%	（31）
3	作品がよく見えるように撮影すること	3.0%	（3）
4	その他	4.0%	（4）
5	無回答	11.9%	（12）
		100.0%	（101）

表10　保育中の記録において難しいと感じること

カテゴリー	テキストマイニングによる文書要約　＊［ ］は筆者が補足
子どもとの関わり	・写真を撮っていると、子どもと関わって遊べない
	・写真に夢中になると子どもの対応が上手く出来ない
	・［子どもと］一緒に遊んでいるので、場を離れたりしづらい
保育者の体制	・子どもの対応に専念したく、撮影する先生がいない時
	・限られた人数で安全確保に努めながらタイミング良く撮ること
	・クラス単位で活動しているためフォローの体制がない
写真の内容	・撮りたいと思う時にタイムリーに写真が撮れなかったりする
	・［子どもの］自然な姿を撮ること（カメラに注目しない）
	・［子どもが］カメラに気付くと自然な姿にならないことがある
その他	・記録のための保育になってしまうこと

「保育者の体制（3件）」、「写真の内容（3件）」、「その他（1件）」が生成された。

（5）自由記述について

質問紙の最後の自由記述では、27件の回答を得ることができた。質問紙の内容や回答者が現在興味をもっている話題、現在保育において取り組んでいること、保育現場の課題、など内容が多岐にわたるため、テキストマイニングによる分析は行わなかった。

今後の課題につながるような内容としては、「ドキュメンテーションを日誌、週案、月案さらに公式文書と連動することができるか」という問題や、「ドキュメンテーションを活用して、家庭や地域に対して保育を可視化し、保育に興味をもってもらう必要がある」ということ、「保育の可視化において、ただ見せるというのではなく、その活動に込められた職員の思いや子どもたちの反応、声、成長が伝えられるように工夫している」、「保育の可視化にあたり、改めて子どもを知るということ（子どもたちの様々な思いを感じ、想像したり、考えたりすることを養い、子ども自身の心が動き、行動できるような支援を目指すこと）に注力している」こと、また保育の可視化やドキュメンテーションの導入については「職員の経験、技術により、捉え方、考え方に大きく差が出てしまうことから、導入することへの難しさを感じている」、「ドキュメンテーションについてはbuzzword（流行語）としての側面を感じてしまう。（原文ママ）」などがあげられる。

4．考察

ドキュメンテーションの導入実態（表1）を見ると、半数以上（54.5%）がすでに導入しているという結果であった。株式会社明日香（「子ねくとラボ」運営）が、2022年３月に保育士94名を対象に行ったインターネット調査「保育ドキュメンテーション」に関する実態調査においても、56.4%の保育園が保育ドキュメンテーションを実施いるという結果が出ている。いずれも調査対象が100名前後であり、調査の規模としては十分とは言えないが、本調査と同時期に行った実態調査においてほぼ同様の数字が示されていることからも、保育施設の概ね半数がドキュメンテーションを導入していると考えることができるだろう。ただし、冒頭でも述べた通りドキュメンテーションの捉えは多岐にわ

たっており、日本国内では保育を可視化した「記録の名称として、「ポートフォリオ」や「ドキュメンテーション」のほかに、「～ニュース」「～カレンダー」「～日記」のような親しみやすい名称や「ボードフォリオ」のような独自の名称を使用している例」（山本, 2018）もあるため、概ね半数が導入しているとされるドキュメンテーションの詳細については不明である。

また、「現在のところ、導入予定がない（24.8%）」や「ドキュメンテーションという言葉を初めて聞いた（11.9%）」については、保育の可視化を行なっていないのか、それとも上述のようなドキュメンテーション以外のものとの棲み分けがはっきりとなされた結果なのか、気になるところである。

保育の可視化と発信においては、デジタルとアナログの活用実態に大きな差は見られなかったが、配信頻度においてはアナログ配信では「毎日（34.3%）」がもっとも多かったのに対し、デジタル配信では「毎日（18.1%）」が 4 番目という結果になった。配信頻度の観点からは、保育の可視化と発信においてアナログ配信の方が活用されていると言える。

また、保育の可視化と発信の「目的」の約半数（47.3%）は、保護者に向けられたものであり、保育者（12.8%）や子ども（9.6%）の割合が少ない点が気になる。岩田・大豆生田（2018）によれば「ドキュメンテーションは、保育者と子どもとの、また、保育者と保護者との、さらには保育者同士同僚との対話のツールとなっている」と述べており、一方通行の報告ツールではないことがわかる。また、野澤（2021）によれば、ドキュメンテーションは保護者にとっては「教育への親の参加のためのツール」であり、子どもにとっては「子ども自身も学びの経験を教師と対話しながら振り返ること」ができるツールであるとも述べている。つまり、子ども・保育者・保護者の 3 者それぞれにとって有意義なツールとして機能することが望まれているのである。その観点からすると、保育の可視化と発信の目的が保護者に向けて行うものに偏っている点は、可視化と発信がドキュメンテーションの本来の機能を果たさず、一方通行の報告ツールになっている現状を示唆しているとも考えられる。

また「保育の可視化と発信の際に配慮していること」を示したワードクラウド（図 1 ）からは、配慮の中心が子どもの「個人情報」の保護の観点であることがわかる。その他の記述の中には「職員や園としての考え（思い）を伝えられるようにする。」「子どもの表情や反応、子どもの声を文字におこして可視化するようにしている。」（原文ママ）といった保育の質に関わるものもあれば、「写真や動画等、子どもたちが平等に写るようにしている。」「どの保護者が見ても不安にならないように、UPする際はしっかりチェックしている。（ex）後ろにトラブルになっている様子が写り込んでいる、泣いている子がいる等々。」（原文ママ）といった保護者に対する細やかな配慮の類のものも見受けられた。つまり、保育を可視化して発信するためには、さまざまな方面の配慮が必要であると理解できる。

さらに、表 8「保育を可視化して発信する上で困っていること」について、テキストマイニングをして得られた要約文をKJ法で分類してカテゴリー名を付けて整理した結果、5 つのカテゴリー（記録時、機材、所用時間、記録内容、その他）と、同様に得られた表10「保育中の記録において難しいと感じること」の 4 つのカテゴリー（子どもとの関わり、保育者の体制、写真の内容、その他）にわけることができた。ここからは、保育を可視化して発信する上での課題が見えてくる。まず、困った状態になる時間帯は「保育活動中」と「記録編集時」に大別することができる。「保育活動中」の困り感は、保育を可視化して発信している人が、子どもと直接関わっている人であるため、記録を撮ることと子どもとの関わり（保育）を両立することの難しさに直面しており、その困難を補う体制が十分でないことが伺える。そして「記録編集時」の困り感については、記録の編集に要する時間に関する問題である。時間を要する原因としては、編集機材（パソコン、プリンターなど）が限られていることや、記録写真の選別に時間がかかることがあげられる。記録写真の選別については、前述の配慮事項にもあったように、個人情報の問題や、子どもの登場回数の公平性

や、伝えたい保育内容が表現されているかなど、諸々の配慮を有することが要因と言えるだろう。自由記述の項目にも「記録編集時」に関わる課題として、子どもの変容をビデオで捉えて園内研修の教材にしているが、動画には無駄な場面が多くその編集の時間が大きな負担となっているという内容であった。

自由記述の項目にあげられていた「ドキュメンテーションを日誌、週案、月案さらに公式文書と連動することができるか」からは、現在は保育の可視化と発信の役割を担うドキュメンテーションの作成が、他の業務（日誌、週案、月案など）と連動しておらず、プラス α の負担になっていることが窺える。

これらの結果を受けて、保育の可視化とその発信において、ドキュメンテーションの機能（保育の可視化、子ども・保育者・保護者の参加と対話を促すなど）を失わずに活用していくためには、常に子ども・保育者・保護者それぞれにおけるドキュメンテーションの目的と意義を明確にした上で取り組むと同時に、ドキュメンテーションが三者間の対話を促すツールになっているかという点を確認しながら進める必要がある。さらに、ドキュメンテーションの作成にかかる負担と既存の業務との関連を見直していくことも重要であると考える。

５．今後の課題

本調査においては、保育現場におけるそれぞれの文脈の中で捉えられているドキュメンテーションの実態を踏まえて、質問紙ではあえてドキュメンテーションの詳細を定義付けずに「写真を使った保育・子どもの記録」として広義に捉えている。ゆえに、研究協力者と筆者との間でドキュメンテーションの内容がどこまで詳細に共有できていたかについては、いささか疑問が残る。次回の調査においては、この点に工夫を加えたい。

また、質問紙の最後の自由記述において「ドキュメンテーションについては、buzzword（流行語）としての側面を感じてしまう（原文ママ）」という指摘があった。実際に、「写真とコメント」というドキュメンテーションの一部の要素だけを取り入れて、ドキュメンテーションの真価にまつわる「子ども理解」の機能や、「単に学びの成果を残すためのものではなく、学びのプロセスの一部として未来の学びの可能性を拓すもの」（秋田・松本, 2021）としての機能、「子ども・保育者・保護者の３者それぞれにとって有意義なツール」としての機能が見当たらないドキュメンテーションが散見される。

今後は、日本の保育現場の中で試行錯誤を繰り返しながら「日本版ドキュメンテーション」（岩田・大豆生田ら,2019）の発展も考慮しつつ、保育現場で生きるドキュメンテーションとその取り組み方について、引き続き考えていきたい。

【脚注】

1）「スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。」User Local テキストマイニングツールのワードクラウドの解説より

2）「文章中の重要な文を抜粋して表示」User Local テキストマイニングツールの文章要約の解説より

【引用・参考文献】

岩田恵子・大豆生田啓友（2018）.「保育の可視化へのプロセス」『多摩川大学学術研究所紀要』24.1-13.

山本麻美（2018）.「学びの活動を振り返るためのドキュメンテーションと幼児の造形作品との関わりについて」『名古屋女子大学紀要』64.387-395.

山本理恵（2018）.「保育におけるドキュメンテーションに関する研究--レッジョ・エミリア・アプローチにおける観察・記録の方法」『愛知県立大学大学院人間発達学研究科』9.75-89.

植草一世（2018）.「子どもに寄り添う保育を行うためのドキュメンテーション」『植草学園短期大学研究紀要』第19-２号. 51-57.

前田和代（2020）.「ドキュメンテーションの写真分析から捉えた保育者の関心」『東京家政大学教員養成教育推進室年報』10. 35-42.

前田和代・浅井拓久也（2020）.「保育におけるドキュメンテーション活用に関する一考察―活用に伴う課題に焦点を当てて―」『東京家政大学研究紀要』60（1）. 21-28.

岩田恵子・大豆生田啓友・鈴木美枝子・田澤里喜・田甫綾野（2019）「ドキュメンテーション型実習日誌」の試みと課題」『玉川大学教育学部紀要』19.125−140.1
高丘有季乃・湯地宏樹（2021）.「保育者のドキュメンテーションに対する考えに関するインタビュー調査」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』36.129−136.
レッジョ・エミリア市自治体の乳児保育所と幼児学校施設（2014）.『レッジョ・エミリア市自治体の幼児学校と乳児保育所の指針』
秋田喜代美・松本理寿輝（2021）.『保育の質を高めるドキュメンテーション』中央法規.
“保育ドキュメンテーションに関する実態”.株式会社明日香ホームページ. 2022/3/14更新. https://www.g-asuka.co.jp/job-info/topics/18672.html（参照2022/9/1）

謝辞

お忙しい中、本調査にご協力くださった東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県の保育に携わる先生方には、心より感謝申し上げます。